

補遺

里井のぶ

茶粥

秋つ陽のかがより野路を帰り来て瞳を凝らす土間の暗みに  
船酔ひに食うべ来ざりし朝飯のをそきはめり涙流れて  
とろとろと熱き茶粥をすすりつつ涙流れてゐたりけるかも  
なげきつつ茶粥をすする厨辺の天窓の上の深き空かも  
蒼き空涯しもあらずふかまりて秋の最中のわがなげきかも  
おほちちの画室に通ふ仄ぐらき廊下の冷えをふみつつなげく  
幾世々をあり経し廊のおのづから雑木紅葉をうつすつやめき  
住みつぎし幾もも年の祖たちの生命にかよふ廊の光か  
檐深く朝の陽のさす古家に二夜いねたり幼き日のごと

右の歌は、祖父吉村赤松の病の知らせを聞きて帰郷せしも、その死に会うべからざりしに詠みたる歌。

雑詠

落着かぬ心をもちて入来つゝマスクを外す茶房の奥に

補遺

思ひつめし事ある如き顔をして入り来しならむこの暗がり  
に歩みつゝ思ひ来し事を薄暗き茶房の奥に定め兼ねてをり

右の歌は、故人愛唱せし歌

昭和四十八年

あかときの闇にはのめく光<sup>ま</sup>正目にたしかめんとし七二年終る  
定まらぬ春のかたちとなりつつもしたたか張らむ一条の根あり  
とどろきて来向う戦車われの肉<sup>し</sup>をふみくだきて往かば往け南ベトナムへ  
南十字暁闇を指す光となりて停戦の刻限なおさだまらず  
あどけなき年ごろを次々と越えゆきてうまごろの春はあはただしも

昭和五十年

かなしみの深きときの間すぎゆきて日照<sup>そ</sup>雨<sup>ぼ</sup>ちりくる冬空の青

昭和五十二年

めでたさも中位の春にたはむれの春  
五勺ほどの夕餉の酒がくせとなりて老いづくもたのし春あはあはと  
乙女子の白き腕<sup>かひ</sup>に喩<sup>たと</sup>へつる寒の大根<sup>おおね</sup>はたわわに干せよ  
水々し春の大根の歯にさやるほどの生命を愛<sup>ま</sup>しまざらめや

老木に残る花の一ひら二ひらにかがよふ春の光はあらむ

昭和五十三年

御題小謡 母

二十五世 観世元正曲

故里の 霞める野辺に摘む草の 霞める野辺に摘む草の 千草乃花の枝々に光満ち露も耀ひて 幸生るゝ国土の 恵ぞ  
母の情なる 人乃世の 優しきことの象徴として その名を呼べば杳なる 嶺に立つ雲のかぎろひに 母が面影 顕つぞ  
うれしき 母が面影

右、年毎の賀状に添へし歌数首。

遺詠

吉野秀雄病床詠をむさぼりて読みつつ更かす夜のいくとき

汝を焼くる一片の灰をつつみもて葬りしは仁科三湖のうちぞ

二三日に満開となりし梅鉢の香にむせつるか寝がたくをる

五十五年二月、右京病院にて手術後、やや体調の回復せし時、吉野秀雄の歌集をむさぼり読みつつ、その書の欄外に書き遺せし歌三首。

汝を焼く歌は、亡き弟彦七郎を偲びて、梅鉢の歌は、新体連より見舞ひに戴きし梅、病室温かく、二、三日のうち満開せし時の作。